

東海地方における多文化サービスの先進的な取り組みから学ぶ

【基調報告】

多文化コミュニティにおけるこれからの公共
図書館
和気尚美（三重大学 地域人材教育開発機構）

1. はじめに

「出入国管理及び難民認定法」の改正により、日本国内に居住する外国にルーツを持つ住民の人口は右肩上がりに増加している。総務省が発表した2019年1月1時点の人口動態調査によると、日本に居住する外国人の人口は過去最多の266万7,199人で、5年連続で増加の傾向にある。総人口に占める割合は2.09%で、はじめて2%を上回った。

また2019年6月には「日本語教育の推進に関する法律」が成立した。これにより、国や自治体には日本語教育を進める責務、企業には雇用する外国人に教育機会を提供するよう努める責務があることが明文化された。

このように外国人政策・多文化共生政策の転換期を迎えた今、公共図書館は公共サービスの一つとして、増加し続ける外国にルーツを持つ住民に対し、文化や情報へのアクセスをいかにして保障していくべきであろうか。

2. 場所や空間を中心とした多文化サービス

21世紀初頭に、コレクションのみでない、場所や空間を中心とした次世代型図書館の理念モデルがJochumsenらによって提示された(Jochumsen, 2012)。また、同時に図書館の実践の場においても、欧米各国を中心に先進的な取り組みが行われてきている。

このような潮流のなかで、ノルウェーでは2013年に公共図書館法(Lov om Folkebibliotek)が改正され、新たに公共図書館の目的条項に「公共図書館は、他からの干渉なく人びとが集う場所であり、開かれた議論や討論のための場(arena)である」という一文が加わった(Kulturdepartementet, 2013)。

2019年8月に開催された第85回世界図書館情報会議(WLIC)・国際図書館連盟(IFLA)年次大会のサテライ

トミーティングでは、報告者のGoltenから、多文化化やデジタル化が進展する時代における、人びとの集いの場としての図書館の役割に関する報告があった。Goltenは、図書館は異なるタイプの市民間のコミュニケーションを可能にしており、自身と異なる価値観や関心に触れることのできる希少な場であると述べている(Golten, 2019)。

日本においても、多文化サービスを図書館内における資料提供にのみ注力するのではなく、民族的・文化的な社会的分断を克服していくための空間として、地域の催しへの多様な形での参画を含めた、より広範な連携を視野に入れながら、場所や空間の活用を検討していくべきであることが指摘されている(Koizumi & Teruyama, 2016)。

本報告は、場所や空間を中心とした次世代型多文化サービスの在り方について、国内外の事例を示しながら論じていく。なお、本分科会が今回、東海地方における多文化サービスに焦点を当てていることから、本報告における国内の事例は、東海地方に限定し提示していく。

3. 東海地方における場所や空間を中心とした多文化サービス

2018年12月時点の東海地方における在留外国人数は、愛知県260,952人、静岡県92,459人、岐阜県55,205人、三重県52,087人の計460,703人で、全国合計2,731,093人のうち約17%を占めている。近年、右肩上がりで増加し続ける外国にルーツを持つ住民に対し、コレクションのみでなく、場所や空間を拠点に多様な図書館プログラムを提供しようとする試みが一部の公共図書館で取り組まれている。

3.1. デジタル絵本づくりワークショップ

愛知県の豊橋市図書館は、ワークショップ「絵本であそぼう」を継続的に実施している。「絵本であそぼう」では、ポルトガル語、タカログ語、日本語等で絵本の読み聞かせをした後に、タブレットアプリ「ピッケのつくるえほん」を用いて絵本づくりのワークショップを開催している。作成したデジタル絵本は、日本語や参加者の出身社会の言語で音声や字幕を付けることが可能で、さらに、完成した絵本を冊子として印刷し持ち帰ることがで

きる。「絵本であそぼう」の特徴は、アウトリーチサービスを基本としている点にある。外国にルーツを持つ人が多数居住している団地の集会所を拠点とし、そこに集うブラジルやフィリピン等をルーツとする 3-12 歳の子ども、およびその保護者を対象に活動を展開している。「絵本であそぼう」は、創作活動を楽しむ場、日本語を体験的に学習する場、さらに出身社会の言語と接触することのできる場でもあり、参加者によってその場の機能や意味を多様に付与することができる。

3.2. 多言語おはなし会

岐阜県図書館では、ボランティアの「外国絵本サポーター」による、外国絵本のおはなし会や、外国語による読み聞かせが、偶数月の第1日曜日に行われている。これまでに、英語・中国語・韓国語・ポルトガル語・ドイツ語・スウェーデン語・スペイン語・ハンガリー語・フランス語による読み聞かせを実施している。「外国絵本サポーター」には、年1回研修の機会が設けられており、絵本に関する専門的な知識や、おはなし会の技術の向上が図れるようになっている。

3.3. ブックスタート事業

また、ブックスタート事業を通じて、外国にルーツを持つ親子にアプローチしている図書館も存在する。愛知県豊田中央図書館は、健診会場の一角でブックスタートを展開しているが、外国にルーツを持つ親子には「こんにちは！赤ちゃんえほん」という読み聞かせの方法や、読み聞かせに適した絵本を紹介するブックレットを、英語・ポルトガル語・中国語の3言語で提供している。加えて、事前に申し込みがあった場合には、市で雇用している通訳職員が健診会場内を同行しており、ブックスタートの事業趣旨や読み聞かせの際には通訳が図書館スタッフと参加者の間のコミュニケーションを支援している。

静岡県浜松市では、健診会場ではなく、図書館、保健福祉センター、ショッピングセンターのいずれの会場でも受講可能な形態でブックスタート事業を展開している。外国にルーツを持つ市民の中でも特に大きな割合を占めるブラジル出身者に対しては、浜松市立図書館にて、年4回、ポルトガル語でブックスタートを実施している。またフィリピンにルーツを持つ家庭に対しては、年1回、NPOと国際交流協会の主催により、新生児のパスポートや出生届の申請を受付けるフィリピン出張領事サービスの際、浜松市立図書館の職員が会場の一角でブックスタートを実施している。

4. 海外における場所や空間を中心とした次世代型多文化サービス

ここでは、海外における場所や空間を中心とした次世代型多文化サービスの取り組みを提示していく。

4.1. デジタルアーカイブ

近年、住民が主体的に地域にある文化資源を電子化し、写真や動画、音声等として保存する、住民参加型のデジタル・アーカイブが増加している。Roued-Cunliffeらは、地域住民が主体的に地域の文化資源の保存に参加することを“参加型文化保存 (Participatory Heritage)”と呼んでいる (Roued-Cunliffe, 2017)。

移民の背景を持つ住民が多く生活している、米国ニューヨーク市クイーンズ区にあるクイーンズ図書館 (Queens Library) は、「クイーンズ・メモリ (Queens Memory)」というデジタルアーカイブを通じて、住民による住民のための“参加型文化保存”を行っている。住民は、各々が個人所有するクイーンズ区に関する写真や動画、音声等を自由にアップロードすることができる。例えば、クイーンズで過去に活動していたアマチュアのhip-hopグループの音楽作品や、出身社会の郷土料理の紹介音声等、多様な記録が「クイーンズ・メモリ」に保存・公開されている。さらに、クイーンズ図書館は、インタビューによるライフストーリーの聞き取り方法に関するセミナーや、越境時の感情を歌にして図書館内の一角で発表する企画等、多数のプログラムを提供している。現在のクイーンズ区は、多様な背景を持つ人びとによって形作られており、個人が背景に持つライフストーリーを住民自身の主体的な参加により記録・公開していくことで、地域の歴史の変遷をアーカイブ化しようとしている。

4.2. 広域自治体における多文化サービス改革

多文化サービスは単館の努力で実施されることが多いなか、韓国の西部に位置する広域自治体の京畿道は、2019年9月に公共図書館において多文化サービスを推進するための施策を道内一体的に実施していく計画を発表している。京畿道内における多文化サービスの重点課題は3点存在する。

1点目は、公共図書館で活用可能な多文化サービスのマニュアルを整備することである。マニュアルは、図書館における多文化対応の在り方や、多文化プログラムの企画・運営等の内容で構成される。マニュアルの中で示される手法は、実際に道内10館の拠点図書館で展開される。

2点目は、多文化サービスに関する財政支援である。公共図書館・多文化支援センター・地域児童センター等の拠点図書館に対し、プログラムの実施や資料購入のための予算が配分される。

3点目は、多文化教育活動家の養成である。国際結婚等の理由により韓国に移住した女性の韓国社会への参加を促すことを目指し、対象女性を地域の図書館等において多様な文化芸術活動を担当する専門家として養成するトレーニング・プログラムを実施する。

このように、韓国では広域自治体が先導することで、広域的に図書館等における多文化サービスを同時に進展させようとしていることがわかる。

5. おわりに

本報告では、場所や空間を中心とした次世代型多文化サービスの在り方について、国内外の事例を提示しながら論じた。

東海地方では、いくつかの公共図書館においてコレクションの提供に限定しない、場所や空間を中心とした多文化サービスが先進的に展開されている。しかしながら、その数は限定的で、予算の確保や人材の確保等、事業の継続性は単館の努力に委ねられている。今後は点ではなく、線や面のネットワークとして多文化サービスを進展させる必要がある。その点において、広域自治体が主導して展開していこうとする韓国・京畿道の事例は示唆的である。

また、外国にルーツを持つ住民を、多文化サービスの「受け手」に限定することなく、主体的に構築していく者として捉え直していくことも求められる。その点では、住民参加型デジタルアーカイブを構築する米国の「クイーンズ・メモリ」の事例は参考になる。住民参加型デジタルアーカイブにおいて、外国にルーツを持つ住民は必ずしも「利用者」に限定されず、「構築・保存」にも主体的に参加することができる。この点にこれまでの多文化サービスとの違いがある。

場所や空間を中心とした図書館サービスに関する実証的な研究は少ない。上記した事例を今後も注視していくと共に、プログラム等の機能や外国にルーツを持つ者への影響等について実証的な調査を進めていきたい。

参考・引用文献

Jochumsen, Henrik; Rasmussen, Casper Hvenegaard; and Skot-Hansen, Dorte. "The four spaces - a new model for the public library," *New Library World*, 2012, vol.113, no.11/12, p.587-597.

Kulturdepartementet. Lov om Folkebibliotek. 2013-06-21, <https://lovdata.no/dokument/LTI/lov/2013-06-21-95>.

Golten, Elin. "Public Libraries as Place and Space:

New Services, New Visibility," IFLA WLIC 2019, 2019, p.1-8, <http://library.ifla.org/2708/1/s09-2019-golten-en.pdf>.

Koizumi, Masanori; and Teruyama, Junko.

"Balancing the Hybridization of Public Libraries and Private Companies." *The European Business & Management Conference 2016: Official Conference Proceedings*, 2016, p.19-37.

Roued-Cunliffe, Henriette; and Copeland, Andrea eds. *Participatory Heritage*, Facet Publishing, 2017, 216p.

【報告】

浜松市立図書館の多文化サービス
～立ち上げから電子図書活用まで～
鈴木早苗, 長谷川欣司 (浜松市立中央図書館)

多くの機械製造工場がある浜松市は、働き先を求めて来日した在留外国人の方が多く居住し、現在の外国人登録者数は約 23,000 人です。当館は 2014 年から多文化共生のための取り組みを本格的に開始し、近年は、新たに導入した電子図書も活用しながらサービスの展開をはかっています。取り組みの中で感じた課題や実施の難しさも交え、これまでの経緯を報告します。

【報告】

ことばと文化を学べる日本語 e ラーニングリソースの紹介
東健太郎 (国際交流基金関西国際センター)

はじめに

国際交流基金関西国際センターでは、海外の日本語学習者の継続学習や自立学習の支援の一環として、e ラーニング教材の開発を行っている。本報告では、ICT を利用したウェブサイト、アプリ、オンラインコース等の e ラーニング教材とその活用方法について紹介する。

今回の大会開催地である東海地方では、日系ブラジル人や中南米からの定住者が多く、日本語教育の必要性が非常に高い。しかし、時間的・経済的な制約から日本語教育を十分に受けられずに生活を続けている定住者は少なくない。多くの定住者が利用する公共図書館でも、日本語教育に関する問い合わせに対応する必要性は高いで

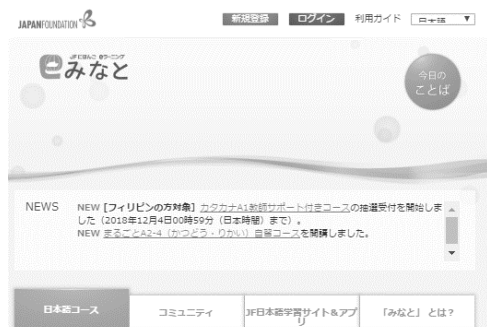
あろう。定住者より日本語教育について情報を求められた際に、自分のペースで、無料で学習できる日本語 eラーニングについて紹介できれば定住者にとっても、公共図書館にとっても有益なのではないだろうか。

本報告では、国際交流基金関西国際センターが開発した日本語学習のためのプラットフォーム「JF にほんご eラーニング みなと」(以下、「みなと」と)と日本語学習のためのウェブサイト「まるごと+」、ひらがな及びカタカナを学習するためのアプリ「Hiragana / Katakana Memory Hint」について実演を交えながら紹介していく。

1. JF にほんご eラーニング みなと

「みなと」は学習管理システム (LMS) を備えた日本語学習プラットフォームである。ユーザー登録をすることで、「みなと」上で開講される日本語オンラインコースを受講することができるとともに、コミュニティを活用して共通の趣味を持つ世界中の仲間と交流ができるようになっている。「みなと」は 2016 年 7 月より運用を開始した。現在の登録者数は 10 万人を超えており、世界中の 186 か国・地域で利用されている。日本でも 4000 名近い登録者があり、様々な地域の定住者にも利用されている。

「みなと」では 50 以上の日本語コースが開講されており、登録者は興味、レベル、学習スタイル、解説言語から自分に合ったコースを選んで受講することができる。



日本語をいつでも、どこでも学べます



日本語コース(45) 教師サポート付きコース(20)



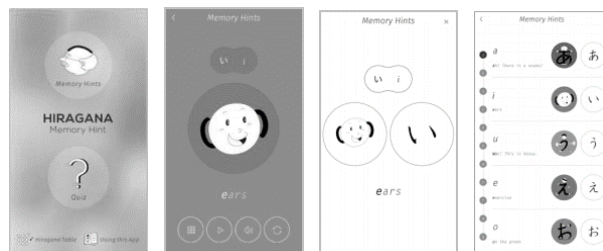
2. まるごと+ (まるごとプラス)

「まるごと+」は国際交流基金が開発した日本語教材『まるごと 日本のことばと文化』のサポートサイトである。2013 年に入門 (A1) レベルを公開し、2014 年に初級 1 (A2), 2017 年に初級 2 (A2) を公開した。コンテンツには、発話練習ができる「ドラマでチャレンジ」「かいわ」や、文法が学習できる「ぶんぼう」、日本の生活と文化を動画で学習できる「せいかつとぶんか」がある。各コンテンツは、スマートフォンやタブレットにも対応しており、インターネット環境下であれば、いつでもどこでも学習できる。



3. Hiragana / Katakana Memory Hint

「Hiragana / Katakana Memory Hint」は連想イラストとフレーズで楽しく仮名を覚えるメモリーヒントとクイズで学習できるスマートフォン及びタブレット用のアプリである。iOS 版と Android 版にて公開されており、無料で全世界からダウンロード可能である。一度ダウンロードすれば、時間や場所を選ばずにオフラインで利用できる。



Read the Hiragana

Time 0:10

3/70

よ

su yo

ka

• More

Similar Hiragana

Time 0:07

3/70

re

ね れ

わ

Good!

Score 6/10 Time 00:21

00:21

Try Again

Quiz Menu

• Reset Time

Hiragana Table

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	ゆ	よ		
ら	り	る	れ	ろ
わ	を	を	を	を
ん				